

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

明治7年に出版された書籍に、「学問で重要なのは、それを実際に生かすことである。実際に生かせない学問は、学問でないのに等しい。」と福澤諭吉が記している。新しい知見を広めることの大切さを、今から137年前に世の中へ訴えていたことになる。消化器外科は消化器疾患を対象とする手術を中心とした治療医学である。この分野の進歩は特に昭和から平成にかけて著しく、例えば多くの消化器疾患の手術成績が向上した。新しい知見が次々と発表され、実臨床に生かされてきた。

論文発表の場の一つとして、日本消化器外科学会雑誌がある。本誌は消化器外科関連の和文誌の最高峰の位置づけとなっている。私は編集委員として長年、査読業務を行ってきたが、どの投稿論文からも筆者の立派な志が伝わり、査読のたびに何とか掲載まで漕ぎ着けられるようにという思いが強くなっていく。編集委員会は筆者とのやりとりを繰り返し、時間がかかっても質の高い論文になるように努めている。しかし、物理的な制約があるため完成度の高い論文が優先して採用され、すべての論文が掲載されることは残念ながら不可能である。

本誌に論文を投稿することを考えたり、実際に投稿した消化器外科医は、おそらく多忙な日常の中で時間を調整して論文を作成したはずである。論文執筆のABCを習得し、論文執筆に取りかかった姿勢は評価されなくてはならない。希望どおりに本誌に掲載されれば理想的であるが、たとえ掲載されなかったとしても、救済してくれる雑誌が必ずあるので、論文執筆をためらうことはない。

「後から来るものは、先人達を越えるのが決まりごと」とも明治の学者が述べている。大きな一歩でなくとも、小さな一歩でもあってもいかなる論文発表は学問の進歩に貢献できるはずだ。自分の論文の採用通知を受け取ったとき、そして出版されたとき、われわれは感動を覚えるものである。日常臨床の充実感と、論文掲載時の感動をともに体感できる消化器外科医生活を多くの先生方にお薦めしたい。

(小澤 壯治)

2011年7月1日